

序章

1. はじめに

私が海外に目を向け、草の根技術協力に取り組み始めたのは2002年からです。当時の年齢は43歳、海外デビューとしては遅いのか、ちょうど良いのかは分かりません。それまではどちらかという国内志向であり、海外の仕事に携わるなどは夢にも思っていませんでした。でも、できることは何でもやろうとの意気込みだけはありました。

協力分野は廃棄物管理改善であり、専門は有機廃棄物のリサイクル、もっと絞り込むと生ごみのコンポスト化です。私の初めての海外活動は、2002年に北九州市が実施する国際協力銀行(JBIC)の廃棄物に係わる調査案件への参加であり、場所はインドネシア共和国スラバヤ市でした。その2年後の2004年には、(公財)北九州国際技術協力協会の依頼を受けて、先の調査結果を生かした地球環境基金のプロジェクトである“スラバヤ市の廃棄物減量化・資源化事業”に3年間取り組みました。このスラバヤ市での活動の中で、生ごみコンポスト技術である“高倉式コンポスト”を考案・完成し、スラバヤ市の廃棄物減量化に大きく貢献することができました。この実績が高く評価され、高倉式コンポストの技術としての効果が認められ、今も開発途上国の様々な国・地域で活用されています。

私の海外活動は草の根活動を中心としており、現地のコミュニティに積極的に入りこみ、行政・NGO・住民の方々とのコミュニケーションを大切にしています。生ごみコンポストの対象や規模は家庭レベル～中小規模のコンポストセンター～大規模コンポスト(プラント含む)まで対応可能であり、コンポスト技術を指導する対象者も様々です。その活動の中で、現地で必ず立ち足はだかるといってもよい大きな壁が、「生ごみのコンポスト化は上手くいかない。悪臭の発生と虫が湧く迷惑施設だ。」というネガティブな先入観です。このように思い込む原因は、生ごみコンポストは手軽なりサイクルであり、様々な国・地域で取り組まれたものの悪臭と虫の発生に悩まされ、しかも低品質のコンポストしかつくることができず、途中で頓挫する(した)という経験を持っていたからです。この壁を打破するためには、コンポスト技術について系統的に理論だって分かりやすく、そして、実演を交えて説明する必要があります。特に住民にとっての楽しさが加わることも必要です。この楽しさがあってこそ、「家庭コンポストに取り組んでみよう」「自分でやってみよう」との思いが強くなり、また、コンポストセンターを設置して実施する場合は、住民が「ごみを分別しよう」「協力しよう」の気持ちが湧き出てきます。

海外技術協力の実施に当たって、行政・NGO・住民などへの啓発活動は試行錯誤を繰り返し、特に草の根活動では住民とのコミュニケーションを大切にしてきました。

私は海外技術協力の活動を、JICAの草の根活動・青年海外協力隊・海外研修生受け入れ研修を中心に、直接現地に赴いての指導は13か国(アジア:インドネシア、タイ、フィリピン、マレーシア、スリランカ、ベトナム、ブータン、カンボジア、中南米圏:ニカラグア、コスタリカ、エクアドル、エルサルバドル、グアテマラ)、国内での海外研修生の受け入れ研修・指導は50ヶ国以上に対し実施しています。

この生ごみコンポスト技術を指導するという経験は、廃棄物管理改善プロジェクトの1つのパーツでしかありませんが、住民を巻き込むためにはどのようなアプローチが必要であるかを身をもって感じ、考えることができるようになりました。

そして、この経験が発展し、カンボジア王国プノンペン都廃棄物管理改善プロジェクトに係わり、住民活動側からプロジェクトを推進する担当になりました。これに対しては、私はコミュニティや住民とのコミュニケーションの取り方や係わり方についてのノウハウを有しているとの自負は持っています。しかし、コミュニティの廃棄物管理全般を改善する点では経験不足であり、それに取り組むための系統立てたノウハウを持つ

ているわけではありませんでした。また、草の根技術協力プロジェクトや他のプロジェクトであっても、プロジェクトには実施期間が決められており(プノンペン都廃棄物管理改善プロジェクトは3年間)、その期間内にプロジェクトの成果が地域に定着することを目指すことになります。これはプロジェクトに十分に時間があるようで、実は時間が足りないという状態です。

そのため、少しでも効率よくプロジェクトを進めようと思い、図書を購入したり、ウェブ検索から、コミュニティの廃棄物管理改善のためのアプローチ方法・実践について様々に情報を集めました。そして、収集した情報をもとに活動のイメージをつくり上げようとしたのですが、鮮明ではなくぼやけたイメージしか湧いてきません。そのような状態でプロジェクトがスタートしてしまいました。その後は、四苦八苦しながらもコミュニティに入り込み、住民の「廃棄物管理改善は自分の事」との理解を促しながらプロジェクトを進めることができました。その時に思ったのが、「具体事例にもとづいた内容であればもっと分かりやすい」ということです。



このような思いから、本書をまとめることを思い立ち、その機会を得ることができました。

私が経験した「プノンペン都廃棄物管理改善プロジェクト」の事例をもとに紹介する視点や知見は、住民啓発を中心とする海外協力活動に参考となる内容を多く含み、かつ、現場での生の声を聞くことができる具体的な事例を多数盛り込んでいるつもりです。これから海外協力に取り組もうとしている方をはじめ、様々な方々の一助となり、少しでも役に立つことができれば幸いです。

2. 本書の構成

プロジェクトの流れの順を追って、パワーポイントを使用したプレゼン風にまとめています。イメージ的には、映像としてスクリーンに映すスライドと発表用のノートです。また、コラムも随時設けています。そこでは読者の皆様に親近感を持っていただくように、失敗談も含めたエピソード、現地での工夫点、失敗を避けるために気を付けたこと、参考となるデータなどを記述しました。

3. 本書を読むうえでの留意点

本書では1つの具体例をもとに臨場感が得られるように記述したつもりです。本書を読み進めるに当たり、是非ともその場面々々の情景を思い浮かべてください。1枚1枚の写真であっても良いですし、映画やドラマの様に流れる映像であっても構いません。この情景を思い浮かべることが、先にも述べた『得られた情報をもとにつくり上げる“プロジェクトのイメージづくり”』に該当します。プロジェクトのイメージづくりができたということは、プロジェクトに係わる知識・知見を得ている、ある程度のプロジェクトのシミュレーションができていると言えるでしょう。また、現れるイメージは個々の経験によっても異なってきますし、また、イメージ化の容易さも変わってきます。プロジェクトの経験が少ない方や活動分野が異なる方にとって、本書がそれを補うことになることを期待しています。

本書を読み進め、所々で立ち止まり、その場面の様子、自分が活動しているであろう様子など、自分のプロジェクトに置き替えてイメージしてみたいはいかがでしょうか。

